仏教幼稚園における園庭環境についての一考察
―園児のあそび、学び、生活環境の向上や仏教保育に繋がる園庭改善事例から―

鶴見大学仏教文化研究所所員　　仙田　考

１．はじめに

日本における幼稚園、保育園、認定子ども園の総数は平成 27 年現在：38,126 園（保育園：24,509；幼稚園：11,674；認定こども園；1,943、平成 27 年現在）である（文献 1, 2)。また仏教園の総数は、佐藤（文献 3）が示すように、下記を参考に、

①公益社団法人日本仏教保育協会の加盟園数（文献 4）

平成 27 年現在：1,069 施設　幼稚園 598　保育園 480　こども園 21

②公益社団法人日本仏教保育協会「改訂わかりやすい仏教保育総論」（文献 5）に記載の宗派別保育団体加盟数

平成 22 年現在：約 2,897 園（幼稚園、保育園、こども園の総数）

であり、これらから日本全国における仏教園は全園の数％（約３～９％）の割合と考えられる。

近年、乳幼児施設の園庭環境において、運動や自然遊びを含めた多様な体験が展開できる園庭環境構成の重要性が指摘されている（文献 6, 7, 8)。そうした体験を支援できる環境を実現するため、園庭改善の検討・実践を行っていくことは大きな方策となりうる。

仏教園においても同様に、多様な体験が展開できる園庭環境が重要とみられ、また、仏教保育との関わりも考えられる。保育環境と仏教保育の関連性については、富岡が環境デザインのコンセプトとの関連性（文献 9)、また屋外環境とのかかわりでは、動植物の飼育・栽培（文献 10）の視点から検討を行っているものが見られる。

そうしたことから本稿では、園庭環境全般のデザインと仏教保育とのつながりという視点に着目し、筆者が園庭整備の専門家として協力依頼を受け、特に深く関わった仏教幼稚園の園庭環境整備２事例の実践内容、そ

の後の活動内容の観察、園幹部へのヒヤリングを通して、園児のあそび、学び、生活環境の向上や仏教保育に繋がる園庭改善や園庭環境の可能性について考察を行うものとする。

２．仏教幼稚園での園庭改善の取り組み

・事例１：学校法人 W 学園 A 幼稚園、B 幼稚園、C 幼稚園「自然の森計画」

1）創生前の園環境について

学校法人 W 学園の A 幼稚園、B 幼稚園、C 幼稚園は、岐阜県 X 市にある浄土真宗の私立幼稚園である。A 幼稚園（1955 年創立）が最も古く、次に B 幼稚園（1965 年）、その後 C 幼稚園（1979 年）が設立された。本園と呼ばれる A 幼稚園に本堂があり、住職が理事長および A 幼稚園、C 幼稚園の園長を務めている（B 幼稚園は現在別の方が園長を務めている）。ヒヤリングは住職兼学園理事長の K 先生に対し行った。

仏教保育とのつながりでは、毎朝のお祈りや仏教のお話し、毎月 1 回の本堂へのお参りと住職のお話、花まつり、成道会、涅槃会の行事が行われている。

園案内では、「幼児期は人間形成の基礎づくりをする大切な時期です。園では、心の豊かな人に育ってほしいという願いのもと、『感謝の心』や『命を大切にする感性』をはぐくむ保育を心がけています。そして、のびのびすくすく育つ環境を創っていきます。」と記されている。

また学園では、「子どもは、自然環境の中で人として育つ」という方針のもと、子どもが自然に対してより深く体験的なかかわりが持てるようにという願いから、各園の園内を積極的に緑化する「自然の森計画」を 15 年ほど前から進めている。園の HP では、「自然の森計画」について、このような紹介がされていた。

> 「３園では、幼稚園の創始者であるフレーベル先生（ドイツ）の精神に基づき、幼児の育つ環境として自然が最も大切であると考え、『自然の森計画』を進めております。また、創立時より仏教精神に基づいた心の教育を掲げ、人間と生物は共生的（共に生きる共に生かされる）関係である事、すべての命はつながっている事について

説いております。」

筆者は 2004 年の A 幼稚園絵本館の庭の計画設計をきっかけに、延べ 10 年以上にわたり、3 園の豊かなあそび、学び、生活や仏教保育に繋がる環境づくりに関わることとなった。

2)「自然の森計画」の内容と創生方法

2-1) A 幼稚園

A 幼稚園は、幹線道路沿いの住宅地に位置する幼稚園である。園舎増築および敷地拡張により、現在の施設構成となり、園庭は本園庭、なかよしガーデン、なかよし広場、絵本館の庭と分散配置となっている。本堂は園舎と一体で、2 階に位置している。

①絵本館「絵本の庭」: 2005 年

A 幼稚園創立 50 周年記念事業として、園舎棟の道路を隔てた新敷地に、子どもたちが絵本に親しめる絵本館を建設することになり、絵本館の東西の小庭を、子どもたちが絵本の世界観を体感できる庭を計画した。東側には、絵本を外で楽しめるように、小さな芝生の築山と周囲に里山の樹木を配し、西側には、絵本の中で出てくる花や草木、土や砂など自然物との出会いが設けられるよう、砂場や花壇を作り植栽を行った。絵本館には平日クラスごとに訪問（各クラス平均月に 2-3 回）し、絵本の読み聞かせや各自読書、貸し出しも行われている。小庭が絵本室からすぐそばにあることで、屋外での読書や外遊び、どんぐりなど自然物の発見も行われている。

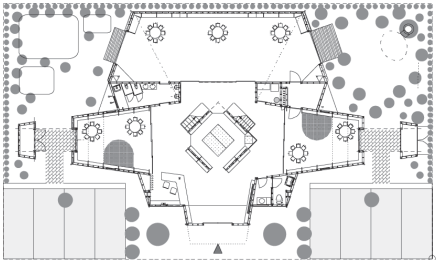

図 1、写真 1 A 幼稚園：絵本館「絵本の庭」平面図（左）、写真（右）

②運動広場「なかよし広場」：2009 年

以前園で整備を行った、なかよしガーデン（果樹園、小川、小池、風力発電設備等）の西側敷地を拡張し、園児がのびのびと遊びまわることができる運動広場「なかよし広場」を整備することとなった。運動場を中心に、屋外倉庫の計画や周囲に里山の木々の配植を行った。また敷地境界のフェンスは、園児の安全性を確保しつつ、保護者の方々が登降園時に歩道側から広場の様子に気付けるよう、スリットの空いた木板のものを用いた。歩道側にも高木や低木を緑化し、歩行者が緑を楽しめるよう配慮を行った。園舎棟前の園庭は広場が少ないため、ボール遊びなど動きのある遊び場所として活発に活用されている。

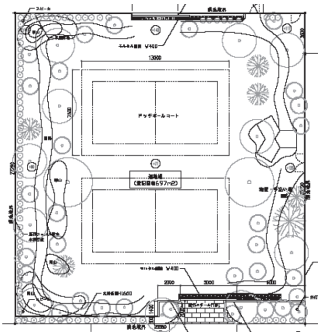

図 2、写真 2　A 幼稚園：運動広場「なかよし広場」平面図（左）、写真（右）

③「緑化駐車場」：2011 年完成

なかよし広場北側の砂利駐車場を緑あふれる園づくりの一環として、緑化駐車場として整備した。なかよし広場から絵本館に向かう際の園児用歩道と駐車場車道の動線を明確に分離し、また駐車場内の園路を一方通行の回遊型とし、安全性の向上を図った。

④「園舎・園庭・本堂の調和改修計画」：2013, 14 年

園舎と本堂が一体である本園にとって、幼稚園と本堂の環境をどのように調和していくかが園にとって長年の懸案事項であった。かつて幼稚園の園舎を作る際、場所がなく、お寺を上に、下に保育室を作った。その後園児が増え、園舎増築を重ねることで、園舎・園庭・本堂が混在することにより、次のような課題が残された。

写真 3, 4　A 幼稚園：園舎・園庭・本堂の調和改修計画（左：改修前、右：改修後）

写真 5,6 A 幼稚園:中庭改修。本堂と園舎を繋ぐ中庭デッキ遊具回廊整備。(左:改修前、右:改修後)

写真 7, 8　A 幼稚園：園舎外壁エコ改修。珪藻土壁、壁面緑化（左：改修前、右：改修後）

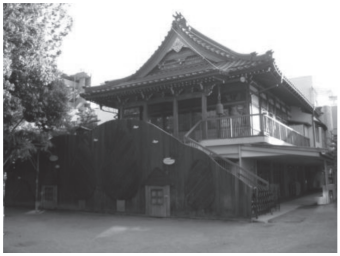

写真 9, 10 A 幼稚園:本堂前階段外壁周囲改修。鐘つき堂、陶板仏画設置（左:改修前、右:改修後）

課題 1) 参拝者の本堂への動線

参拝者の本堂への動線はつぎの 2 通りであった。①北側道路からお寺兼住職宅を抜けて 2 階に上がり本堂に行く。②南側道路沿いの園門扉から入り園庭を抜けて、屋外階段から 2 階に上がり本堂に行く。いずれにしても、住職宅もしくは園庭を通過しなければならず、道路から直接本堂へ容易に行くことができない環境があった。

課題 2) 園児の本堂への動線・仏画への目線

本堂は保育室の上に位置しているが、本堂と保育室は動線上、直接繋がっておらず、園児が仏教行事や本堂参拝の際は、園児は玄関で一度外靴に履き替え、園庭にある屋外階段で 2 階に上がり、靴を脱いで本堂に上がる手間があった。また、園舎中庭上部の園舎 2 階壁面に大きな仏画があるが、中庭で遊ぶ子どもには位置が高すぎ気づきにくい状況があった。

課題 3) 園庭のあそび場や遊具の活用

園舎棟に挟まれた園舎中庭の低学年園児のあそび場が十分に活性化されていない現状があり、また園庭全体に遊具が多く、あそび環境の配置を整理・見直しの必要が求められた。

課題 4) 園と本堂の外観の調和

本堂は切妻屋根の木造建築であるが、幼稚園園舎や園庭遊具、階段壁面の意匠は幼児向けの色彩が強く出ており、住職（理事長）は寺としての存在感を弱く感じていた。

以上の課題を検討し、園舎・園庭・本堂の改修のマスタープランを作成・提案および協議を行い、2011 年から創立 60 周年（2015 年）に向けて、段階的に下記の整備を行うこととなった。

対策 1）参拝者動線と幼稚園動線の明確な区分け

参拝者の本堂へは、北側道路から住職宅から入る動線も確保しつつ、南側堂から本堂に至る動線を整理することとなった。ほぼ活用されていない南側道路沿いの園の門扉を撤去し、新たに山門を作り、2 階本堂への階段を山門側に作り直して、道路から本堂まで園庭を通らず直接行けるようにし、合わせてこの場所に鐘つき堂を創生した。

< 施設改修内容 >

i) 本堂への屋外動線整備：2013 年

計画内容：山門、本堂前園路・階段、鐘つき堂新設

活動内容：参拝者の動線。園児の仏教行事での本堂訪問（月数回）、鐘つき（当番制、毎日）

対策 2, 3）仏教保育に繋がる、園児の仏教施設への容易な動線配置、およびあそびの活性化に繋がる園庭あそび場の再構築

園舎中庭に遊具パーツが取り付いたデッキ回廊を作り、回廊を通じて、園児の本堂への訪問や仏画への近付きが容易に行えるよう配慮を行った。また、デッキ回廊では、園舎 1, 2 階、南北園舎の園児の上足のあそび場・出会いの場の創生を目指した。

園庭部では、長らく蓆を敷き養生の場であそび場として活用できなかった、園のシンボルツリーのケヤキの巨樹の根元（半径 5m 程度）上部への回遊デッキ敷設や、砂場拡張、藤棚新設、既存遊具の再配置など、園児のあそびが活性化されるよう環境整備を行った。

< 施設改修内容 >

ii) 中庭デッキ遊具回廊「ぐるりん」：2013 年

計画内容：デッキ広場、遊具回廊（ネット、滑り台、滑り棒等）、子どもタワー（階段）、大階段（仏画への動線）、2 階回廊（本堂への動線）

活動内容：上足での園児あそび、交流。未就園児親子のあそび。仏教行事やイベント、集会

iii) ケヤキ回遊デッキ：2013 年

計画内容：ケヤキ根元上部の円形デッキ

活動内容：園児の周遊あそび、ケヤキとのふれあい

iv) 園庭あそび場の再構成：2013 年

計画内容：砂場拡張および藤棚新設、既存遊具の再配置

活動内容：園児の遊具あそび、自然あそびや異年齢交流の場

対策 4）園と本堂のそれぞれの存在感と全体の調和性のある外観

園舎外壁の色彩はピンクと青といったパステル調であったが、珪藻土の

薄い茶系色とし、また新設のデッキ遊具回廊も木造として、本堂の雰囲気と調和するよう配慮した。合わせて壁面緑化や屋上に太陽光発電パネル設置を行い、園の「自然の森計画」のコンセプトが園舎としてもメッセージ性が伝わるよう計画した。珪藻土の外壁や壁面緑化は、真夏の時期の断熱対策としても考慮した。

本堂前の階段壁面は幼児向けの意匠であったが、中庭のタイル壁画のお釈迦様誕生の話と異なる、涅槃会の多くの動物の様子が描かれた陶板壁画を設置した。また、本堂・鐘つき堂が正面に見える敷地東側道路沿いの門扉は、木造のかぶき門とした。全体として、園と本堂がそれぞれの存在感を保ちながら、仏教園として、また幼稚園のあるお寺として、全体の調和性のある外観の創生を目指した。

＜施設改修内容＞

v）園舎エコ改修

計画内容：外壁改修（珪藻土）、壁面緑化：以上 2013 年、屋上太陽光発電パネル：2011 年

活動内容：園児の自然あそび、発電パネルのモニターでの環境エネルギーの学び

vi）園と寺の景観的な融合

計画内容：鐘つき堂前壁面の陶板仏画、東側のかぶき門：2014 年

⑤絵本館横「小規模保育棟の庭」：2015 年

その後、絵本館の北側の土地を拡張することになり、未就園児保育（2歳児）および預かり保育を行える、小規模保育棟を新設することになった。絵本館と空間的に一体として活用できるよう計画を行った。

2-2）B 幼稚園

B 幼稚園は、A 幼稚園から車で 20 分強離れた、住宅と畑地が広がる郊外に立地する幼稚園である。園庭は、運動場、砂場、遊具を有する園舎前園庭および、園敷地から 100m 程離れた場所に第 2 園庭があり、屋内体育館・温水プール、人工芝ミニサッカー場、陶芸窯の小屋などの施設がある。これら第 2 園庭の施設は 3 園で共同利用をしている。

①自然の森ビオトープ：2005 年

2005 年度の創立 40 周年記念事業として、園では第 2 園庭の空地に、子どもたちが身近な自然と触れ合える空間を創生・活用していきたいとの想いがあった。園舎前の園庭には広場や遊具はあるが、園児が園内で豊かな自然とふれあえる空間は少なく、また家庭生活でも地域の自然とふれあう機会が少ない状況があった。

そのため、創生したい自然空間についての要望を園から伺い、また在園児保護者に向けた第 2 園庭空地活用についてのアンケートの結果を考慮し、園との協議の上、身近な自然にふれあう機会が意外に少ない当園の子どもたちが、小さな自然池や草原のなかで、幼児が自ら自然を発見し、自然への興味につなげられるよう、下記の園庭ビオトープの計画立案を行った。

＜施設改修内容＞

計画内容：生態池、小川、水車、手押しポンプ、観察デッキ、里山樹木、手足洗い場、遊び園路、ゲート等

活動内容：園児の自然あそび（観察、発見含む）や異年齢交流、園児、卒園児、教職員、地域（地域の農林高校生）との環境活動（植樹、維持管理活動含む）、交流

i) 創生過程

整備は園の 40 周年記念事業として位置づけられ、園と PTA を中心とした 40 周年記念事業委員会が立ち上がった。筆者は園庭整備の専門家として、園及び委員会と協力しながら事業計画の立案支援や自然空間の計画設計を行った。

また当事業では、園児をはじめとして、園のコミュニティ全体で行うことを提案し、在園児、卒園児、教職員、在園児保護者、卒園児保護者、地域の方々との協働で自然空間の創生を行ってゆくこととなった。

池堀の仕上げや地ならし等の土工事、水辺の防水や観察デッキ工事など外構業者が担当した部分もあるが、計画段階のアイデア出し、制作段階の池、小山、園路づくり、メダカ・ドジョウの放流など、できるだけ親子が創生に関われる機会を多く設け、自然空間を皆で創生する機運を高めるよう配慮した。

（なお当事業は、平成 17 年度岐阜県私立学校教育振興費補助金（教育改革推進特別補助金、学校ブランド化推進事業の対象事業）を活用して実施された。）

［計画段階］2005.2-4

・保護者、教員より園庭改善のアンケート

・スケッチや模型によるイメージの検討、打合せ

・園、ＰＴＡ、40 周年記念事業委員会での説明、打合せ

［設計段階］2005.4-5

・打合せを基にした図面作成

［制作段階］2005.5-2007.10

・園児、教員、保護者、卒園生、地域参加による池、小山、園路づくり 2005.5-11

・専門家（業者）による仕上げ作業（土搬入、井戸掘り、ポンプ、観察デッキ、設置、給排水工事、水車工事、低木植樹等）2005.5-11

・創立 40 周年記念式典のビオトープ完成式とメダカ放流 2005.11

・高校生（市内の農林高校）高木植樹作業・ドングリワークショップ（高校生の園児へのドングリのポット苗づくり指導）2006.3

・園児栽培によるコナラ（ドングリ）のポット苗を生垣植栽 2006.7

・園児と小動物の棲み家づくり 2007.10

ii）創生後

自然空間の創生後も、在園児、卒園児、未就園児親子、保護者会親子活動などで活発に自然あそびや観察、生き物探しや環境活動に活用され、子どもたちの自然への興味関心、生き物を通して生と死に気づくきっかけ、自然を通した人々の交流が高まる場所となっている。

［活用・維持管理段階］2005.11-

・未就園児のおあそび会や見学会での生き物探しや観察会（年間 30 回程度）

・3 歳児クラス：ビオトープで生き物探しや観察会（月 1 回程度）

・4 歳児クラス：小川や手押しポンプの水遊び、メダカ観察など（月 1 回程度）

・5 歳児クラス：観察デッキなどメダカの観察や池の生き物観察など（月 1･2 回）
・スポーツクラブ会員（幼稚園児・小学生等）：子供達に開放し、メダカなどの観察（練習日）
・幼稚園保護者会：親子によるビオトープの水草や雑草の維持管理活動

写真 11 B 幼稚園：自然の森ビオトープ

② B 幼稚園園舎エコ改修：2009 年

B 幼稚園では夏休み中に夏季保育を行うため、夏の間の暑さ対策は大きな課題であった。しかしできるだけエアコンを導入しない形で対処を行いたいとのことから、様々な環境配慮技術を導入しながら園舎のエコ改修を行うこととした。

特に屋外や自然との関わりの中では、

１：西側保育室の縦ルーバー設置・壁面緑化
２：保育室前デッキおよび井水のあそび水路
３：珪藻土外壁による外断熱

など、緑や水、土といった自然素材に包まれる園舎環境の創生を行った。

2-3）C 幼稚園

C 幼稚園は、A 幼稚園から車で 30 分弱程離れた、大きな川に程近く、

畑が残る住宅地に位置する幼稚園である。2015 年現在、園庭は地上部に本園庭（広い運動場や遊具）、いも農園、花と果樹と竹の広場が、園舎屋上に屋上広場がある。

◎いも農園、花と果物と竹の広場、屋上庭園の整備、シンボルツリー植樹：2009 年

園庭南側の敷地を拡張することになり、2009 年に迎える C 幼稚園の創立 30 周年記念の一環で、「自然の森計画」として計画整備、活用することとなった。

園庭南側を拡張し、いも農園を設け、竹林や樹林が残る敷地最南部の緑地は、そのまま活用かつ果樹をさらに植樹し、園児が積極的に自然遊びを行えるよう安全面の整備を行った。記念式典に合わせて、ボダイジュの巨樹（高さ 7m）の植樹を行った。

また、園舎の断熱効果を図るとともに、2 階の保育室の園児が気軽に屋外で遊べるよう、芝生や果樹、パーゴラ、見晴台などを設けた屋上庭園の整備を行った。

写真 12, 13 C 幼稚園：ボダイジュ植栽（左）、いも農園（右）

以上の園庭環境整備を踏まえ、学園理事長は仏教保育と環境のつながりについて、次のように話している。

「仏教の考えかたでは、生きとし生きるもの、人間と自然に対し差別がない。自然環境については、人間と自然―仏教では共生関係であり、ともに支え合う関係で、上下関係がない。学園では、自然環境を重視してきたが、仏教の哲学的なところからきている。生きとし生けるものはすべて仏になる素質を持っている。いのちの教育の大切さは食事からくる。作ってくれた人への感謝、私のいのちはほかの生命によって支えられている。多くのいのちに感謝しましょう、そして手を合わせる。いのちを教えるにはいのちにふれあわないとできない。だから、実際に自然環境、動植物とふれあう。そのためにビオトープや自然環境、栽培の場を作ることが大切。」

また、A 幼稚園園舎と本堂を繋ぐ回廊遊具の整備と仏教保育の関係性については、以下のように話している。

「園児にとっての影響は間違いなくある。回廊を整備後、毎日年長園児が当番制で鐘をつく。また園長もしくは主任が毎日登園後放送で仏教のお話をするが、仏教行事の際、壁画を見せてからお話をする。仏教行事が（以前よりも）子どもたちにわかりやすく、行いやすくなった。3 学期が始まると郵便屋さんごっこをする。園長や友達に年賀状を書く。中にはののさまに書く子がいる。仏教園は、命の問題もそうだし、いつも見守られているというのがある。誰も見ていなくても、仏さまは見ている。子どもたちが意識する。（園庭に）仏教画があると意識されるかもしれない。（中略）お寺の空間は生活の一部になっている。」

・事例 2 ：学校法人 Y 学園 D 幼稚園「D 幼稚園震災復興園庭計画」

1）創生前の園環境について：2012 年　54 年目

学校法人 Y 学園の D 幼稚園は、福島県 Z 市にある真言宗の私立幼稚園である（1959 年創立）。幼稚園真横に本堂があり、住職が理事長および

園長、ご息女が副園長を務めている。ヒヤリングは園運営を実質的に担当されている副園長に対し行った。

D 幼稚園は仏教保育を基本理念とし、建学の精神として生命尊重を掲げている。定期的な本堂へのお参り、花まつり、成道会、涅槃会などの行事が行われているほか、登降園時に誕生仏に毎朝手を合わせるなど、日々の生活の中で仏教保育が培われている。

本園は、水田、畑地、住宅地沿いで小高い山の中腹に立地している。2002 年に改築された本園舎、2000 年に建てられた保育センターの二つの園舎があり、その中央に園舎前の園庭、そして本園舎裏側にお山の園庭が広がっている。（筆者は本園舎完成時に園庭のマスタープランの作成に関わった。）

本園は地域に開かれた幼稚園づくりを目指しており、また園内の多様な自然との関わりを大切にしていることから、「D ファーム」と名付けられた、多様な自然遊びのための園庭創生を園児、教職員、保護者、地域とともに、長年にわたり積極的に行ってきた。園舎前の園庭には、木製のプレイハウスや遊具、水あそび場、自然生態池、花壇、緑の小道などを、また、子どもたちが日常遊びに行く園舎裏側のお山にも、頂上部の広場や築山・土管、野外デッキステージ、ツリーハウス、斜面すべり場などの場を設けてきた。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災により、幼稚園園庭を支えていた 20-30 年前に作られた石積み擁壁が崩壊し、園児のあそび、学びの場であり地域の憩いの場であった園庭が被災した。余震が続いていた 4 月、安全性の確保から、地域の土木業者による損壊した擁壁の除去作業が行われ、桜の巨樹や手作りの遊具、水のあそび場、花壇など、それまで園が皆で作り上げてきたあそび施設や自然を含めた園舎前の園庭の半分以上、および本園舎と保育センターとの動線が失われる結果となった。

また、本園舎東側木造建屋も被災し、震災半年後取り壊されることとなった。（また、お山の野外デッキステージやツリーハウスも被災した）

筆者は園庭整備の専門家として震災直後に連絡を受け、2011 年 4 月初めに状況を確認後、震災復興園庭計画の立案、提案を行い、整備事業に携わった。

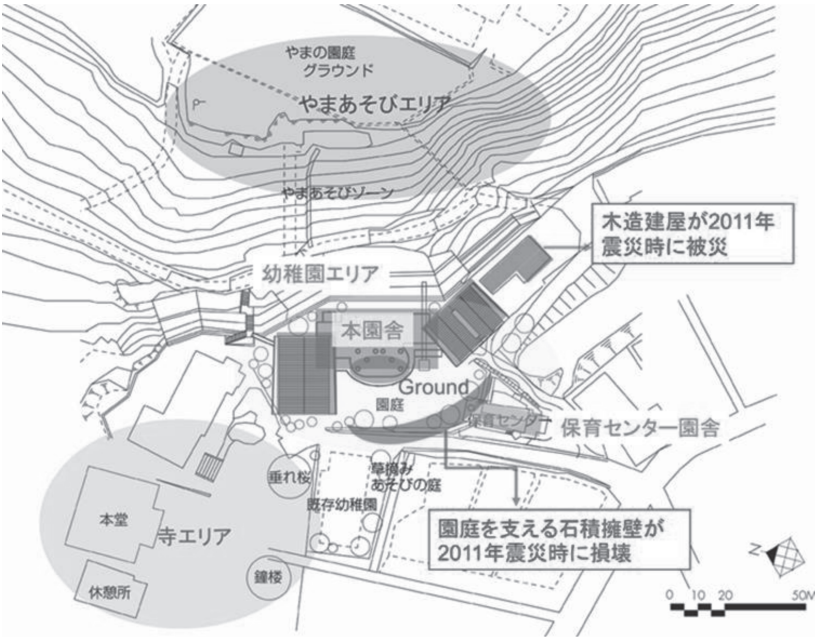

図３ Ｄ幼稚園（園舎、園庭）、本堂の関係図

2）「D 幼稚園震災復興園庭計画」の内容と創生方法

2012 年に文部科学省の震災復興補助金の申請が受理され、撤去工事、擁壁新設工事および外構工事など、園児の生活の安全に関わる工事が実施の運びとなったものの、園児の屋外活動としての園庭整備のための資金は不足している状況であった。

当時この地域では震災や原発事故の影響により、自由な外遊びが難しい状況が続いていた。しかし、こどもたちの未来をつなぐためにも、園庭に新たな緑や自然のあそび場を創ってゆく必要があると園では考えていた。そこで同年、財団法人都市緑化機構の緑化助成プログラム「緑の環境デザイン賞」へ応募し、緑化事業を通して、子どもたちのあそび、学び、生活の庭としての再生を目指してゆくこととした。以下が緑化事業計画のコンセプトである。

［1］震災復興：ブルーシートのかぶる震災の爪痕が残る園庭を、緑化によって、幼稚園・地域の再生の象徴とする。

［2］教育：子どもたちが、屋外のみどりを通して、保育、遊び、交流によって、自然、環境、いのちについて学び、健やかに成長できるよう、四季の変化や五感を柔らかく刺激する、幼稚園に来るのが楽しくなる植栽計画とする。

［3］癒し：震災、原発・放射能の影響はいまなお続いています。緑化や園芸、ビオトープ創生によって、自然が回復することを目にすることで、自然への畏怖と共に、自然から癒しを感じ取れるような緑化をめざす。

［4］周囲環境とのつながり：お寺、園舎上部のお山、下に広がる田園風景と幼稚園が自然につながるよう、積極的な緑化や段々畑の設置など、景観的・生態的なつながりを図る。

［5］地域とのつながり：空間的なつながりのみならず、地域の方々とのひととひとのつながりも大切にする。本幼稚園は震災の日、高台に立地していたことから、園児のご家族をはじめ、地域の方々の一時避難の場所となった。緑化によって、地域の方々がより立ち寄りやすい雰囲気の幼稚園をめざしてゆくこととする。

被災して失われた園庭の自然空間を再生し、子どもたちが豊かな自然とのふれあいを通して、植物栽培と食、動植物による季節の変化や、自然、環境、いのちの大切さに気づき、学ぶことができる空間とする緑化事業計画内容が評価され、採択、助成が決まり、下記の園庭整備が進められることとなった。

① 園舎前園庭（損壊した園庭を再生）

計画内容：園舎と保育センターを繋ぐ園路・ブリッジ、芝生斜面、段々畑

損壊した園庭部分を再生するプロジェクトである。安定勾配とした園庭斜面を活用して、本園舎と保育センターを繋げる園路と階段を整備した。園路位置は、下から上がってくると、園舎横の寺が見えてくるよう配慮した。また、斜面でゆったり過ごせる芝生斜面のエリアと野菜作りが行える段々畑を創生した。

② 第２園庭：ふれあいの庭（旧木造建屋敷地を再生）

計画内容：生態池、せせらぎ、水田、手押しポンプ（井水）、芝生広場、

緑のトンネル、樹林、菜園、園路

被災した木造建物敷地部分を再生するプロジェクトである。水や水辺の生き物とのふれあいができる、手押しポンプ、小川、生態池。緑を育てられる、水田、菜園、樹林（果樹含む）。それらをめぐる園路、緑のトンネルの整備を行った。

i) 創生過程

ふれあいの庭の創生過程については、土工事や、池の防水工事、植栽工事など外構業者により行われた部分と、園参加型で行われた部分があった。土工事が終了した 2013 年 3 月、3 回にわたり、園児、教職員、保護者、地域の方々と共に、水辺創生のための井戸掘り、手押しポンプ用の土間作りを、井戸業者の指導の下実施された。肌寒いなかであったが、参加者は共同作業を楽しみながら行っていた。

ii) 創生後

創生後、再生されたふたつの園庭は、子どもたちのあそび、学び、生活、出会いの場として日常的に活発に活用されている。

斜面を走り回ったり、田畑での植物栽培、池や小川での水辺の生き物との出会い、多くのあそびが生まれている。

写真 14, 15　D 幼稚園：園庭の様子　震災前（左）、震災直後（右）

写真 16, 17　D 幼稚園：園庭の様子　園庭整備後

写真 18, 19 D 幼稚園：園路を上ると（左）園庭から本堂が見える（右）

写真 20, 21 自然との関わりの事例：B 幼稚園植樹（左）、D 幼稚園田植え（右）

上記の園庭環境整備をふまえ、副園長は次のように話している。

「園庭は子どもたちの生活そのものであり、土・水・木・光・風など、生命そのものに触れる場所である。園庭には生まれる、育てる、死ぬものもたくさんある。今の園庭には、ふれられるものがたくさんあることが大事ではないか。五感を大切にすること。循環していることが、なんとなくわかるということ（が大事）。震災がきっかけとして、ふれられる自然が少なくなったので、せまい幼稚園の中で四季を感じたりすることができる意図的な庭づくりが大事だった。（中略）あの時失くしたいのちをいっぱい見てきた。新しいもの、未来に続く場所を創れたことが大きかったと思う。栽培するとかだけでなく、芝生に寝転んで気持ち良かったり、井戸を掘ったり、田んぼ、池、小川にやってくるちがう虫や鳥（との出会い）、いろんなことができるんだという。自分たちの居場所をつくるということは人にとって大事ではないか。」

「命にふれる仏の小道。朝夕手を合わせてお供えをしていく。野菜

の収穫をしたら、お供えに行く。生き物のお墓もある。くも、ざりがに、カブトムシ、にわとり、うさぎ。子どもたちは命に近いところにいる。そういう意味で園庭は大切（である）。」

３．考察

上述した仏教園における園庭環境整備の事例から、園児のあそび、学び、生活環境の向上や仏教保育に繋がる園庭改善や園庭環境の可能性について、主に次の視点が挙げられると考える。

・園庭はいのちの教育―自然との共生を学ぶ場

仏教保育においては、ひとと自然は共生の存在であり、野菜や果物を栽培したり、植物や動物、昆虫にふれ、生と死に出会い、いのちを感じることができる。園庭環境はその出会い、学びの場として重要であり、だからこそ自然とのふれあいの場（水辺、森、草原、水田、菜園、果樹園、飼育小屋、様々な自然空間）を園児の生活空間＝園庭に設けてゆくことが大切であると考えられる。

・園庭は生活の中で仏教観を培う場

1）仏教に関わるシンボルの存在

園庭に仏画（見ることができる）、仏像（お参りできる）、仏典植物（触れられる）、鐘つき堂（鐘つきができる）、お寺（訪問できる）が存在し直接関われたり、動線上目立つ場所や見えやすい場所にあることで、子どもたちが仏教やお寺に親しむことができるとともに、お参りや仏教行事が子どもたちの生活の一部となる。また、仏様に見守られているという感覚にも結び付くことが考えられる。

2）園と寺の空間的連携・配置構成

園と寺が同敷地または隣接している場合、園舎・園庭から本堂が見える配置計画や、回廊・階段など園から寺への移動動線が容易であることで、上記 1）の視覚的効果とともに、仏教関連の活動や行事を日常的に寺に訪問して行いやすくなり、幼児の仏教やお寺への親しみや、仏教が生活の一部につながりやすいことが考えられる。

【謝辞】本稿執筆に当たり、資料提供やヒヤリングにご協力いただいた２学園の先生方、並びに本稿の園庭整備に関わられたすべての方々に、深く感謝の意を表します。

文献

1）厚生労働省 (2015）平成 26 年社会福祉施設等調査の概況 .
http：//www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/14/dl/kekka-kihonhyou01.pdf
2）文部科学省 (2015）平成２７年度学校基本調査（確定値）の公表について .
http：//www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2015/12/25/1365622_1_1_1.pdf
3）佐藤達全（2008）仏教保育に対する保育科学生の意識変化について―「仏教保育」の授業を中心に―. 鶴見大学佛教文化研究所紀要 13, 99-120, 2008-04
4）公益社団法人日本仏教保育協会 HP：日仏保の組織：加盟園（平成 27 年度現在）.
http：//www.buppo.com/kyoukai_sosiki.html.
5）公益社団法人日本仏教保育協会編（2010）改訂 わかりやすい仏教保育総論 . チャイルド本社
6）仙田満・井上寿・仙田考（2005）幼稚園の建築計画、環境計画 . 文教施設 , 文教施設協会 , No.17, pp.56-71.
7）仙田満・仙田考監修（2009）特集：教育環境（幼・小）における校庭・園庭環境を考える . 文教施設 , 文教施設協会 , No.33, pp17-59.
8）財団法人日本生態系協会（2008）新装改訂版 学校・園庭ビオトープ . 講談社
9）富岡量秀（2012）仏教保育の環境デザイン (1）子どもの育ちを支えるデザイン・コンセプト展開への視点 . 大谷大学短期大学部幼児教育保育科研究紀要（14）, pp41-48.
10）富岡量秀（2013）保育環境への飼育・栽培導入の意義を考える：仏教保育からのセンス・オブ・ワンダーへの視点 . 大谷大学短期大学部幼児教育保育科研究紀要（15）, pp35-41.